

## 21世紀をむかえるためのOR

オーストラリア産の襟巻トカゲが日本に輸入され、一時は日本中が大さわぎであった。ようやくそのさわぎがおさまったと思ったら、今度はコアラである。

TVもコアラ到着以前から、その習性や可愛い姿などを紹介していた。特に餌についてはユーカリの若葉しか食べないという特異な動物であるだけに大変である。しかもユーカリには100種以上の種類があって、コアラが食べるのはその中の30数種類だそうだ。日本でコアラを飼うためには、そのユーカリの栽培からやらなければならない。また、コアラ舎は空調設備、照明調整装置、モーター装置などをそなえ、それぞれマイコンで制御される近代設備である。建設費はざっと3億円だそうだ。

コアラをむかえるためには、多勢の係員が入れ替り、立ち替りオーストラリアまで行って、飼育の指導を受け日本で栽培したユーカリを現地に送って、コアラが食べてくれるかどうかを確かめたり、大変な準備が必要である。

コアラのご到着がまた大さわぎで、空港から動物園までの沿道はVIP並みの厳戒体制で、当日はタクシー会社も“見物客やヤジ馬に巻き込まれないように迂廻ルートをとれ”という注意報を出したほどであった。TVはその模様を詳細に報道していた。

しかし、このはしゃぎようはどれも素直に受けとれないのである。コアラは自然保護の象徴的動物であるといわれている。コアラこそ住み慣れた現地で大切に保護されてしかるべきである。“可愛いから”とか“子供が喜ぶから”という理由だけで連れてくるのはどうもいただけない。1億総ピーターパンということか、日本の強引な動物輸入が諸外国でひんしゅくを買っているときでもあり、自粛してほしいものである。この矛盾を子供たちにどう説明するのだろうか。

また、小中学校の給食の食べ残しが問題になっている。それも大変な量がゴミ処理場へ送られているのである。食糧を十分入手できるのは先進国の人々だけであって、地球上の10億人以上の人々が飢えに苦しんでいるという事実を子供たちにも教えてほしいものだ。

ようやくTVもアフリカの飢餓状態や地球の乱開発などの話題をとりあげるようになった。ユニセフの大使になった黒柳徹子さんのアフリカ巡回記録、エチオピアの

惨状など記憶に新しい。

有限である地球において、一部の知恵のある人々、一部の資源を握っている人々だけが飽食し、軍備をもち、飢えに苦しむ多くの人々を見殺しにしているということは、人類の歴史上恥ずべき汚点であるといっても過言ではあるまい。

10月30日付夕刊の“アフリカへの善意第1便”の記事を見てホッとしたのは、私だけではないと思う。いっぽう、飢えるアフリカにいくら食糧援助をしても、中間機構に搾取されて、本当に飢えている草の根に届くのはほんのわずかであるともいわれている。そうならないようにやってほしい。いずれにしてもこの種の援助は一時しのぎであって恒久的な解決にはならない。世界が21世紀を無事にむかえ、子孫に平和と繁栄を残そうとするならこの問題の恒久的な解決を図らなければならない。

“充電しないと、しぼむぞ”という広告が気に入って秋の研究発表会に参加した。“第三世界とマイコン”という森口繁一先生の特別講演をうかがった。その内容は本号に掲載されていると思うが、その恒久的な対策の1つとして救いを感じた。人々がその気にさえなれば方法はあるということだ。読者諸兄にぜひご一読いただきたいと思う。

ORは作戦研究に端を発し、高度成長時代には投資計画や施設計画に代表されるような、大きくするための問題に多く利用された。また、石油ショックに直面した時代には省エネルギー、省資源、コストの低減に代表されるような、小さくするための問題に多く使われ、ORは一段と職場に根をおろし普及してきたものと思われる。

さて、これからのORが直面する問題は、というよりチャレンジすべき問題は、このような21世紀をむかえるための問題であろう。つまり第三世界の経済を浮上させることが、即、先進諸国も成り立っていく条件であり、そのために何をすればいいのかという問題である。また先進国、特に日本にとっては高齢化社会をどのようにむかえるかという深刻な問題もある。今年もORは忙しい年であろう。さて大変なラッパを吹いてしまったと反省しているが、正月号でもありお屠蘇気分ということでお許しを願いたい。(M.M)